

社会福祉法人兵庫県社会福祉事業団 総合リハビリテーションセンター 能力開発部長兼職業能力開発施設所長・あけぼのの家所長が思う 「知的障害者への就労支援①」

1 社会参加活動について

皆さんは「なぜ働くのですか」と質問されたらどう答えますか？大人になったら働くのは当たり前という考え方もあるでしょうし、お金を稼いで一人暮らしをするため、或いは欲しいものを買いたいからと答える方もおられると思います。お金を稼ぐために働くしながらも、いざ働き始めたら仕事する理由はお金だけではないと気付くことが多いですよね。

仲間との共同作業や自分で手がけた仕事が形になっていくことや、仕事をすることで誰かに喜んで貰うことがあれば、自分も人の役に立てたと嬉しくなり、人から期待されていると感じ、仕事をするやり甲斐を実感することもあるでしょう。

他にも、任された仕事が難しい仕事でどうすればよいか分からず、自らの力不足を嘆いたり落ち込んだりしながらも、上司や先輩に相談し、自分なりに一生懸命考え試行錯誤を重ね、ようやく一つの仕事を完結させた時には、我ながらよく頑張ったと褒めたくもなります。

働くことは生計の維持にとどまらず、社会の一員としての役割を担うことや個人の力を高めるなど、その意味合いや目的に違いはあっても、多くの方々にとって大切な社会参加活動の機会です。この社会参加活動は、規模の大小はあれども皆に等しく与えられている活動機会であるはずです。しかし、実は「皆に等しくない」ことに気付かれます。働くことは当たり前の社会参加活動であるはずなのに、障害のある方が当たり前に働くとした時、たちまち社会の一般的な常識や無理解から活動を阻まれることがあるのです。



2 障害特性と困りごとについて

知的に障害のある方々は、どんな特性がありどんな困りごとを抱えているのでしょうか。

(Aさんの場合) Aさんに、将来はどこでどんな仕事をしたいですか？と尋ねてみても明確な答えが返ってきません。何故ならAさんは社会経験が乏しく、世の中にどんな仕事があり自分にどんな仕事が出来るのか、どんな仕事を好み何が苦手なのかといった自分自身の事がよく分からない上に、自身の考えや思っていることを相手に上手く伝えることも苦手だからです。

社会経験が乏しい上に、自分の事を知る力や自分の思いを相手に伝える力の乏しさという特性があり、仕事をしようとした際には自己判断や意思表示の面で困りごとを抱えることになりました。

(Bさんの場合) Bさんはとても真面目な方で、任された仕事は一生懸命に取り組もうとされますが、言葉の理解や記憶力に不安があります。新しい仕事を担当する時などに上司や先輩から仕事の進め方の説明を受けるのですが、よく分からなくとも笑顔で「はい！」と返事してしまうため、ミスした際に周りから「理解できていると思っていたのに・・・」ということになります。



先輩の説明を聞きながら、分からぬところがないか尋ねられても、体系的に物事を捉えるのが苦手なBさんには、語彙の乏しさも相まって、何を尋ねられているのかが分からずに「分からぬところが分からない」という状況に陥ることもしばしばあります。そればかりか、話している最中に相手に伝えたいことを忘れ

てしまうことも珍しくありません。

Bさんにとって、物事を順序立てて覚えることや使い慣れない言葉の理解など、知的な部分の特性が仕事する上での困りごとに繋がっていました。

(Cさんの場合) Cさんは、スマホの操作は出来ますが、仕事の用語や手順の記憶が苦手です。簡単な足し算や引き算はなんとか出来るのですが、文章問題になると頭を抱えて固まってしまいます。会話については非常に饒舌で、スマホもLINEにGoogle、YouTube等、難なく操作されます。また、ご自身の好きなテレビ番組の話などは面白おかしく話されますが、仕事をする上での指示理解という点では、聞き慣れない単語を理解するのが難しい上、それらを記憶して動作に落とし込むことの苦手を感じていました。

Cさんの普段の行動や会話の様子を見ていると、一つ一つを理解する力は乏しくとも、生活を楽しむ或いは潤いのあるものにするための生活力が身についているため、これくらいのことは理解できるだろうと周りから思いのほか高く評価されてしまい、実際には十分理解できていないことが多く失敗に繋がることも珍しくありません。これも特性の一つと言えるでしょう。

いかがでしょうか？この3名の方々の特性や困りごとについて記載しましたが、彼らは自分のことを人に伝えるのが苦手だったり、仕事を教えてもらっても一度や二度で覚えるのが苦手だったり、同じ手順の仕事でも、場面や環境が変わればはじめて取り組む仕事と同じように認識してしまうような一面があったりもします。彼らの特性や困りごとについては、人それぞれ差違はあるけど、共通しているのは自身の努力だけではクリアしにくいということです。

3 福祉サービス等の活用について

私の所属するあけぼのの家は、障害のある方々の「働きたい、働き続けたい」との思いを支援すべく、障害のある方に働く場を提供する事業と、将来は就職して働きたい、或いは働き続けるための力を身につけたいという方にトレーニングの機会を提供する、更には就職後の職場定着を円滑にするための事業を運営しています。

当施設をご利用いただいている方は、身体に障害のある方から、精神に障害のある方、発達障害の診断を受けた方まで様々ですが、最も多いのが知的に障害のある方々です。知的に障害がある方々が当たり前の「社会参加活動」を営もうとする時に、様々な福祉サービスや公的サービスを活用して、障壁やハードルを乗り越えようと努力されます。次号では、その様子を紹介すべく、あけぼのの家が行う就職に向けたトレーニングの内容や、兵庫県が独自に設置する職業能力開発施設等についてご紹介させていただきます。



**社会福祉法人兵庫県社会福祉事業団 総合リハビリテーションセンター
能力開発部長兼職業能力開発施設所長・あけぼのの家所長**

今 中 隆 洋



※兵庫県障害者就業支援ネットワーク会議 事務局
※社会福祉士

特別養護老人ホームで3年間ケアワーカーを努めた後、知的障害者施設の支援員として始めて障害のある方々の就労支援に携わり、気づけばもうすぐ30年。